

FIELD NOTE

no. 74 Sep.

都留文科大学 地域交流研究センター
フィールド・ミュージアム部門 機関誌
【フィールド・ノート】 no. 74 / 2012 / Sep.

10 周年企画

第 2 回

『フィールド・ノート』の活動を振り返る

特集

音

手作りの音に耳を澄まして

はるちゃんの都留生きもの図鑑
～カジカガエルを探しに～

ホトトギスの声が聞こえる
～身近に感じる古典の世界～

鐘、響き、思い。

都留市のあいことば
—方言調査から見たもの—





CONTENTS

04 特集



06 手作りの音に耳を澄まして

08 はるちゃんの都留生きもの図鑑 ～カジカガエルを探しに～

10 ホトトギスの声が聞こえる ～身近に感じる古典の世界～

12 鐘、響き、思い。

14 都留市のあいことば 一方言調査から見たものー



16 音を聞く姿勢

17 フィールド暦

18 工房のドアをくぐると

20 都留市の旧5町村を巡る (2) 旧宝村
宝の「たから」探し

22 ひろいもの 5. ひろうかどうか

24 小さな畑から ー収穫の季節ー

28 おはよう都留

30 水路散策 家中川を追って

32 発見譚 ～書道教室を訪れて～

34 フィールド・ミュージアムのたのしみ 第18回
谷の町・史の里 谷村にあった映画館のこと①「ヤエイ」と私

36 起き上がる朝 ー子どもたちの遊びー

38 富士路を歩く会

40 10周年企画 第2回
『フィールド・ノート』の活動を振り返る

43 センサーカメラが写した動物たち

44 Field・Note News

46 編集後記



表紙写真

7月25日、観察に行く途中の川辺でキセキレイのひなに会いました。この世界に生まれてきて、最初にどんな音を聞いたのでしょうか。

撮影者：北垣憲仁

『フィールド・ノート』では「都留の自然と人との交流」をテーマに、地域の自然・人・文化に関する情報を記録し、発信しています。裏表紙のロゴの絵はアメリカのナチュラリスト、ヘンリー・D・ソローの著書『ウォールデン 森の生活』の初版本扉に、ソローの妹ソフィアが描いたものです。ロゴにそえられている「Grow Wild」はソローの言葉で、その思想をわたしたちも大切にしたいとの想いを込めました。バックナンバーは都留文科大学コミュニケーションホール地下1階の地域交流研究センターにありますので気軽にいらしてください。

特集



わたしたちのまわりには、音があふれている。

人の話し声や動物の鳴き声、
ふだんの生活や自然のなかにある音。
どんな場所にもたくさんの響きがあり、
わたしたちはそのなかで暮らしている。

でも、一つひとつの音を
意識して聞いたことがあるだろうか。

振り返ってみると、
そういう体験はあまりない。

少し立ち止まって身近な音に耳をすませよう。
なにか新しいことに気がつくかもしれない。

音の背後に隠れているものを考えながら
それぞれが気になった音を追いかけてみた。



手作りの音に耳を澄まして



緑に囲まれたたずむ「白石ガラス工房」

都留市上谷の「ギャラリー英」^{はなぶさ}で7月21日まで夏の風物詩展が開かれていたと私が知ったのは、最終日から3日後のことだった。ホームページに載せられた案内の写真には、白地に紫色や緑色が混じった模様の風鈴が写っている。こんな風鈴があるのかと思わず見入ってしまう。一体どんな音がするのだろう。展示期間は終わってしまったと分かっているけど、手作りの風鈴の音を聞いてみたい。勇気を出して作者の白石精一さん^{しらいせいいち}(57)に電話をかけると、快く取材を引き受けてくださった。

深澤加奈（国文学科2年）＝文・写真・イラスト

白石さんの風鈴に出会う

「白石ガラス工房」は大月市真木^{まぎ}にある。緑に囲まれ車の通りも少ない、静かな場所だ。7月27日。工房の外に置かれた椅子に座ってお話を伺う。白石さんが初めてきらきらしたものに興味を持ったきっかけは、小さいころのビー玉遊び。大学生の時、日本初のガラス専門学校ができたことを新聞で知り、大学卒業と同時に入学なさったそうだ。工房を開いたのは今から22年前。おもにガラス食器の制作をなさっていて、風鈴を作り出したのは3、4年前からだ。「エコとか省エネって言葉が出だしてからかな」と白石さん。とりわけ去年、今年と需要が高まっているように感じるそうだ。「風鈴が鳴ると、風が吹いたんだなって分かるよね」。たとえ私たちには分からないほどの微風でも、風鈴はその音色で風の存在を気づかせてくれる。

「ああ、ちょっと待ってて」と白石さんは工房のなかから二つの風鈴を持ってきて、木の枝に吊るしてくれた。風に吹かれて涼しげな音を奏でる。そのあと手元にも別の風鈴二つを持ってきた白石さん。丸くて青い模様がいくつか付



白石さん作の風鈴

いたほうを持ち上げて鳴らしながら「これみたいに模様がついていると厚みがあるところから変わるから、なんとなく音も複雑に聞こえませんか」。その風鈴はウリーン、ウリーンと鳴っているように私には聞こえた。音のなかに微かな振動を感じる。「こっちはすっきりした音だね」ともう一つ、全体が黄緑色のシンプルな風鈴を白石さんが揺らすと、リーンリーンと高くまっすぐな音が響いた。音は風鈴の口の開き具合によっても、こもり気味になったり、大きくなったりする。手作りの風鈴には同じ音のものが一つとして存在しないのだ。

先日の風物詩展のようすについて伺うと、白石さんは「きれいな音がずっと鳴っていても良い訳じゃないですね。お客さんそれぞれに好みの音があつて。もちろん見た目もきれいなものもいいですけど。でもやっぱり、皆さん音で選びます」。



①熱したガラスを巻き取り、パイプに息を吹き込んで膨らませます



②模様となるガラスのつぶを巻き取る



③ぬれた新聞紙を手を持ち、表面をととのえる



④ひもを通す部分を作る



⑤口の部分を広げ、ガラスの厚みも調整する

〈完成〉



ガラスを熱する白石さん。ガラスはすぐに固まってしまうため、作業の合間に何度も窯に入れて熱し直される

自分だけの音

お話を伺った後、じつさに風鈴を作らせてもらった。この日の大月市の最高気温は34℃。作業用の窯は1200℃に保たれていて、その周辺は約50℃だそう。あんなに涼しげな風鈴がこんなに暑い中で作られているんだ！と思いつつ、私は汗を拭いた。さきに、作る過程を白石さんが一通り実演してくれたが、想像以上に難しそう。

ステンレス製のパイプに、熱したガラスを巻き取った後からは手を休めることは許されない。休めれば、溶けたガラスは垂れ下がってきってしまう。さらにその状態から風鈴の形にしていくのだ。「コップのほうが簡単だよ」と笑いながら白石さん。口の開き具合やガラスの厚み。音を生み出すものだけに、細かい部分にまで気を使う作業になる。

作り始めると暑さのことは頭のなかから消え去った。前半の作業はほぼ自力で、後半はだいぶ白石さんに手伝ってもらって、なんとか風鈴の形ができた。

風鈴は500℃に保たれた冷却用の窯に入れば、一晩かけてゆっくり冷ましていく。急いで冷ますとひずみができてしまうそう。『どんな音になってるかな』と白石さんに言われて、そうか、これは私が作り出した音なのか、と気付くと完成が待ちきれなくなった。

耳を澄ますということ

数日後、完成品が届いた。箱から取り出す。風鈴はちよつといびつな形に仕上がっていた。色も思っていたより薄い。でも手に持



届いた風鈴。ゆがみも愛嬌だろうか

って揺らすとトゥイン、トゥインと丸みがかった楽しい音がしたから、見た目はこれで十分だ、と妙に大らかな気持ちになった。

取材に行くまで風鈴の音はどれもチリンチリンだと私は思っていた。勝手にそう決めていた。今ならその時の自分がどれほど音に無関心だったのか分かる。耳を澄ましていると思っても、じつはそれは「澄ましているつもり」だったのだ。

手作りの風鈴の音を聞き、私は作ることを通して初めて耳の澄ましかたを知った。風鈴の音にはそれぞれの個性があること、聞く人が違えば同じ音も違うように聞こえることに気づくことができた。それで何かが大きく変わるわけではなくても、小さな音が聞こえてきたとき、誰かの話に耳を傾けると、きつとこの経験を思い出す。

はるちゃんの 都留生きもの図鑑

～カジカガエルを探しに～



都留は生きものたちの
息吹であふれている。
今日は、どんな生きものに
出会えるだろう。



♪フィーフィーフィフィフィフィフィ

神奈川県立生命の星・地球博物館で、カエルの鳴き声を当てる展示を楽しんでいた時のことだった。ボタンを押すと、とてもカエルとは思えない、鳥のように高くて上品な鳴き声が聞こえてきた。そのカエルの名は「カジカガエル」。私のなかに、じっさいにカジカガエルの鳴き声を聞いてみたい、見てみたい、という気持ちが一気にわきあがってきた。

鈴木陽花（初等教育学科3年）＝文・イラスト

砂田真宏（初等教育学科4年）＝写真

6月27日（水）午後7時25分



図鑑などで調べてみると、カジカガエルは春先に近くの林などから川に下りてきて、6月から8月ごろにかけて繁殖活動をするらしい。そこで、都留市内を流れる鹿留川^{ししあがわ}に向かってみた。耳をすますと、さつそく鳴き声が聞こえてきた。川の瀬音に似ているような、涼しげで透きとおるような鳴き声。オスはこのきれいな声でメスに求愛しているのだ。鳴いている姿をすぐ近くで見えることを目標に、私はしばらく鹿留川に通うことにした。

6月28日（木）午前10時10分



昼間の鹿留川にやって来た。今日の目的は、カジカガエルを捕まえて自分の目で観察することだ。図鑑によると、カジカガエルは水中の石の下にかくれているらしい。何気なく石をひっくり返してみると、さつそく1匹のカジカガエルが飛び出して、あつという間にすいすいと泳いで行ってしまった。続けて近くの石をめくっていくと、カジカガエルの捕獲に成功。体長は4cmほど。体長と図鑑で見た写真のほっそりしたようすから、どう

やらオスのようだ。

茶褐色で平べったい、まるで石のようない見た目。そして、背中のラインがおしりに向かってキュッと締まった、たくましい逆三角形の体。それでいて脚も体長と同じ4cmほどの長さがあり、水かきが発達している。指先には石にしがみつくための丸い吸盤が目立つ。姿かたちから、「この川で生きているんだよ」というメッセージが伝わってくる。

7月8日（日）午後6時50分



曇り空で少し肌寒い日。だんだんと薄暗くなってきたところに鹿留川へ。耳をよくすましてみても、まったく鳴き声が聞こえてこない。石をひっくり返してまわっても、全然見つからなかった。会えないもどかしさを感じつつ、逆にいつでも会えてしまったらおもしろくないはずだとも思う。いつでも会えないからこそ会ってみたいと思うし、時間をかえ





オタマジャクシは大きな口で
流されないように石に吸い付く

たり場所をかえたり、いろいろな作戦を考える。きつとそういう過程が、生きものとの出会いをたからものにしてくれるのだ。

7月10日(火) 午前7時40分



早起きをして鹿留川へ。おひさまの光が気持ちいい、でも少し暑い、そんな夏らしいよく晴れた朝。カジカガエルの鳴き声が、川の瀬音を突き抜けるように響く。涼やかながらも、「ここだよ、ここだよ!」と、瀬音に負けないように、熱くメスに届けと鳴いている声のように聞こえてくる。その音はけっして人間を楽しませるための音でなく、川の瀬音とともに生きていくための音なのだ。

ふとあたりを見渡していると、偶然石の上にいるカジカガエルを発見。背中をあたためているようだ。「鳴かないかな」そう思っ、じつと静かに鳴くのを待った。ところが、しばらく待ってもいつこうに鳴く気配がない。ぼーっとして見ていると、一瞬の隙に向きをかえて水中に飛び込んでしまった。きつと人間にはわからない、カジカガエル独自のタイミングがあるのだろう。

7月16日(月) 午後6時30分



今日は夕暮れ時をねらって鹿留川へ。双眼鏡をもつて、遠くから石の上にカジカガエルがいなかったかを確かめながら歩いていく。すると、石の上に不自然なカタマリが……カジカガエルだ! よく見ないと本当に石のようで気づかない。近くの石にも4匹ほどのカジカガエルを発見した。背中を向けていたり、横を向いていたり、水面から頭だけ出していたり、みんなそれぞれいろいろな体勢をしておもしろい。

今日は少し遠くから静かに鳴くのを待ったが、結局1匹も鳴かなかった。しかし不思議なことに、川岸から引き上げて歩いていると、さつきまでいた方から鳴き声が聞こえてきた。私の存在に気づいていたのだろうか。カジカガエルはよつほど警戒心の強いカエルなのかもしれない。



水中の石の下に身をひそめるカジカガエル

8月3日(金) 午後2時30分



久しぶりの鹿留川の川岸には、たくさんのおタマジャクシたちが泳ぎまわっていた。そのいつぽうで、一日中川岸にいても、親ガエルの鳴き声は聞こえてこなくなってしまう。全国的には8月までとされるカジカガエルの恋の季節だが、鹿留川のカジカガエルたちの春は、ひとあし早く終わりを迎えてしまったようだ。さみしさがこみ上げてくるとともに、来年の夏こそは、あの音が生まれる瞬間を見たいと強く思う。

* * *

今までの私の生きものへのアプローチの方法は、飼育して観察するなど、生きものをこちらに近づける方法ばかりだった。今回の経験から、こちらが生きものに近づいていき、彼らが自然のなかで生きる姿を観察することのむずかしさを知った。でも、そのむずかしさ乗り越えた先には、より生きものと近づき感覚がきつと待っている。都留のあふれる自然のなかで、生きものたちの自然のままの姿に迫っていききたい。



ホトトギスの声が聞こえる

～身近に感じる古典の世界～

都留で迎える三回目の夏。

今年も初夏の訪れを感じさせる音が聞こえてきた。毎年変わらずキャンパス周辺に響き渡るこの音を、私は『古今和歌集』の世界に重ねながら聞き続けた。

三度の夏を通じて見えてくるものとは何だろうか。

牛丸景太（国文学科3年）＝文・写真

キ

ヨッキヨッキヨッキヨキヨ——

谷あいのまちに鋭い声が一筋、響いては消えを繰り返す。深夜の静寂を力強く震わせるその音の主はホトトギス。古来、和歌の題材として愛されてきたこの鳥は、私に古典作品の面白さと奥深さを教えてくれた思い入れの深い鳥でもある。

大学一年生の夏、午前2時をまわって就寝しようとしていた私は、初めてホトトギスの鳴き声を耳にした。真夜中に外から聞こえてくる音と、「てっぺんかけたか」という有名な「聞きなし」(*)がすぐには一致しなかった。けれど、しだいにホトトギスの声だと分かり始め、思わず飛び起きてベランダからその鳴き声に耳を傾けた。高校生のとき読んだ『古今和歌集』夏歌に数多く詠まれていたのは、この声だったんだ！地元では聞くことができなかった本物の音に初めて触れ、驚きと嬉しさに心動かされたあの夜のことはいまでも忘れられない。

その年初めて聞かれる鳴き声は「初音^{はつね}」と呼ばれる。三年目の今年、私がホトトギスの

初音を耳にしたのは6月1日の午前1時40分。あとで振り返ることができるように簡単な記録をつけることを自分に課し、そのつど気づいたら書き留めるような心がけた。しかし、翌朝のことがあったため夜更かしばかりもしていられず、鳴き声を聞きながら寝入ってしまったことが何度もあった。また、それとは反対に聞き続けた挙句夜を明かしてしまいうこともあった、

夏の夜のふすかとすればほととぎす
鳴くひと声に明くるしのめ

（古今集・一五六）

という歌を思い出した。作者の紀貫之は、そろそろ寝ようかというとき、ホトトギスの声を聞きつける。すると、あつという間に夜が明けて朝が来てしまった、という場面を詠んでいる。深夜から薄暗い明け方を経て、あたりが明るくなるまでの時間はほんとうに足早で、歌中に表現されている夏の短夜というものが分かったような気がした。

ところで、和歌にホトトギスの姿が詠われることは少ない。もっぱら鳴き声ばかりが尊ばれてきた。あの声の持ち主は、いつたいど

- * 1) 聞きなし：鳥のさえずりを、それに似た人間の言葉に置き換えて覚えやすくしたもの
 * 2) 鳥類標識調査：鳥に足環などの「標識」をつけて放鳥し、観察・再捕獲によってその鳥の渡りや生態などを明らかにする調査。鳥類の捕獲には環境省の許可が必要

んな鳥なのだろうか。この目で見てみたいと思いついた。自分でその姿を確かめられたら、そこには初めて鳴き声を聞いたあの夜と同じ喜びがあるのではないか、という期待も根底にあった。

6月7日の夜7時40分、大学裏の楽山公園近くで、編集部の西教生さんが実施した鳥類標識調査(*2)に同行させてもらおう。道の両側に藪が生い茂る調査場所には、あらかじめ横12m・縦2m(地上高4m)の網が壁のように張っており、CDラジカセで鳴き声を流して野生のホトトギスをおびき寄せるという。ラジカセからの音声を聞きつけたオスのホトトギスは、縄張りを荒らすよそ者が来たと警戒し、飛んで来るといいうわけだ。鳥が網にかかったら素早く外せるよう、近くに控えて真っ暗な夜の森でじつと待つ。まちの明かりがほとんど届かない森のなかには、もしかしたら遠い昔の夜の空間に似ていたのかもしれない。

調査地に赴く前、本学のキャンパス周辺には例の「キョッキョッキョッキョッキョ」という小刻みな鳴き声が響いていたので、期待

は大いに膨らんでいた。けれどいつまで経っても鳥はやって来ない。それどころか鳴き声すらまったく聞こえなくなってしまう。こちらは声を潜めて1時間ほどひたすら待ち続けたけれど、結局ホトトギスには会えず仕舞いだった。

一抹の悔しさを抱きながら山を下りてゆく。しかし『古今和歌集』のなかで「山ほととぎすいつか来鳴かむ」といつてホトトギスの訪れを待望した人々に似た経験をしたのだと考えれば、必ずしも時間を空費し



富士山麓で撮られたホトトギス。日本には九州以北の山地に渡来し、繁殖する。ウグイスなどに子育てをさせる托卵の習性をもつ。「てっぺんかけたか」と鳴くのはオス(撮影：西教生)

たとは言いつてもいい。「待つ時間」の長さ、それにともなう膨らむ期待の大きさを感じ取ることができたのだから。でもやはり、自分の目で確認したい。この思いは、私が来年ホトトギスの訪れを期待する大きな動機になりそうだ。

ホトトギスの声は最終的に7月下旬まで、昼夜を問わず聞くことができた。その音に触れるたび、姿を見られなかった悔しさを思い出しながらも、古典の内側にあれこれと思い巡らせる機会を得ることになった。和歌の作者は鳴き声から何を感じ、どんなことを連想したのか。あの歌の詠作背景にはどんなドラマや意図があったのだろうか。毎日静かに鳴き声を聞くことは、音を頼りに素朴な疑問の答えを探す小さな試みへと繋がっていった。

ホトトギスの鳴き声は、広くて深い世界を想像し、理解するための入口を示してくれる。私はいま三度の夏を通して聞き続けた親しみの先に、身近な自然を意識しながら古典を学ぶ醍醐味を、この音から感じ始めている。

鐘、響き、思い。

6月26日の夕方、都留市宝地区で写真撮っていると、どこからか鐘をつく音が聞こえてきました。そういえば、お寺の人はどうして鐘を鳴らしているのだろうと、疑問がわいたので、そのお寺を探してみることにしました。

細矢萌（国文学科1年）Ⅱ文・写真



秀雄さんが撞木の縄を握って鐘をつく瞬間

7月15日、鐘を鳴らしているお寺を探に行きました。いくつかのお寺を訪問してうかがったところ、都留市金井の桂林寺で、用津院ゆうしんいんというお寺が鐘を鳴らしているのだと教えていただきました。用津院は、江戸時代末期の郡内百姓一揆のとき、犠牲になった惣代そうだい7人を供養するためにつくられた六地藏を祀っているお寺だそうです。

鐘の歴史

用津院は桂林寺からほど遠くない場所にありました。併設されている家の呼び鈴を鳴らしたところ、中江ムツさんなかえ（82）が出迎えてくれました。鐘についてうかがってみると、「朝6時と、夕方5時から6時に鳴る都留市のチャイムのときに一緒に鳴らすの」とのこと。

ムツさんのお話によると、もともとあった用津院の鐘は第二次世界大戦のときに、「金属類回収令」（金属を溶かして戦争の材料にするための勅令）によって徴収されてしまい、今の鐘は昭和61年5月に作り直したものであることでした。その鐘の装飾やつくりの完成度の高さに、これからお寺を建



用津院の入り口から。左にあるのが用津院の鐘堂。
右が本堂



秀雄さんのデジタル時計。
手のひらに収まる大きさだ

立しようとする人が参考にするために写真
を撮りに来ることもあるそうです。

鐘をつく人の思い

ムツさんと玄関でお話していると、家の
奥からムツさんの夫で、用津院のご住職であ
る中江秀雄さん（88）がいっしょにいました。
毎日どんな思いで鐘をついているのかうか
がってみると、「人々がお釈迦様のところ
にいくようにという願いだな」と、秀雄さん。
その思いの源にあるのは、戦争を体験した
ことが強く影響しているそうです。「戦争は
あつてはならない」。お話を聞いている最中
も、秀雄さんはその言葉を口癖のように何度
もおっしゃっていました。

鐘の響き

「あと少しだな」

胸ポケットから薄型のデ
ジタル時計を取り出しつつ、
秀雄さんが玄関に向かいま
した。自分の腕時計を確認し
てみると、時間は17時55分を
示しています。あわてて秀雄

さんのあとを追ひ、外に出ました。

「6時になると都留市のチャイムが鳴るら。
でもそれよりも俺のほうが正確だ。俺が鐘を
叩いた後にチャイムが鳴る。聞いててみる」

秀雄さんはそうおっしゃって撞木の縄を握
り、ただ黙って真剣に時計を見つめはじめま
した。わたしも同じように黙って腕時計を見
つめます。心の中で3、2、1とカウントダウ
ンをした直後、秀雄さんのおもいきり撞木を
引つ張り、豪快に鐘をつきました。空間をさ
くような音があたり一面に響きわたり、身体
の底にまで音の重い余韻が残ります。そして
一拍おいたあとに、秀雄さんがおっしゃった
とおり都留市のチャイムが鳴りはじめまし
た。秀雄さんはチャイムの音を聞きながら、
続けて5回鐘をつきます。全部で6回鐘を鳴
らすのは、仏教でいう「六道」の教えからだ
そうです。

鐘が思いを響かせる——用津院の鐘の音
には、秀雄さんが人々の幸せを願う思いや、
戦争があつてはならないという思いが込め
られています。鐘の響きは、それらの思い
をわたしたちに届けてくれるという意味を

持っているのだと知ることができました。

今まで鐘の音というものは、ただ時間を
知らせるために鳴らしているのだらうと
思っていました。しかし取材をしてみると、
そこには鐘をつく人自身の思いがあつたの
です。目に見えない、表現するのも難しい
音に思いが込められていることは、わたし
にとつて大きな驚きでした。

しかし、これは今までわたしが気がつか
なかっただけで、本当は、鐘の音だけでは
なく、楽器の音や人の声などのさまざまな
音についても同じことがいえるのかもしれ
ません。いつも聞こえてくる音にはどんな
思いがかくれているのだらう。これから接
していく音に対しても、そこに込められた
思いを探しながら聞いていきたいです。



中江ムツさん（左）と、中江秀雄さん（右）。
用津院の歴史や鐘のことを詳しく教え
てくださった

都留市のあいことば

－方言調査から見たもの－

都留市のかたとお話をしていると、会話の語尾に「ずら」をつけている場面によくあいます。私の地元ではつかわれない言葉を初めて聞いたとき、自分は地元を離れたのだと実感しました。都留市にはほかにどんな方言があるのでしょうか。都留市郷土研究会によって発行された『都留市の方言』(都留市郷土研究会/2008)と、この本の作成に携わった内藤恭義さん(80)と清水正賢さん(84)からうかがったお話を参考に、言葉から都留市の暮らしを探りました。

前澤志依(国文学科3年)＝文・イラスト



地域別の違い

山梨県は「くになか国中地方」と呼ばれる甲府方面と「ぐんない郡内地方」と呼ばれる都留・河口湖方面とに分かれています。都留市の方言、と括弧の前にそこから方言の違いがあるそう。郡内地方の方言は国中地方でもにつかわれる甲州弁よりも、神奈川・東京方面の方言に近いといえます。その理由をうかがうと「やっぱり政治的な違いがあつたんだろうけども、一番大きいのは山脈の違いだね。笹子峠を境にして東と西に分かれるんだよね」と内藤さん。笹子峠は国中地方と郡内地方の境目になっている場所です。1069mの標高があるこの峠は昔、甲州街道のなかでも難所といわれていました。

さらに、都留市のなかでも違いがあります。谷村地区は共通語(標準語)に近いそうなのですが、それでも、「下谷と上谷と比べると上谷のほうが荒いわ」と清水さん。トンネル一つ越えただけでも違うのだとか。さらに細かい違いがあることに、都留市のかたとお話をしているときも気づいていなかったのが驚きでした。

愛着をもってつかう言葉

『都留市の方言』によると、「ずら」だけでなく、「べえ」を語尾につけることもあるそう。それを「べえべえ弁」といいます。「行くべえ」「走るべえ」などと動詞につくときは、推量・意志・勧誘の意味をもちます。いつぼうで、「ことんべえ」「うしんべえ」「かにんべえ」と特定の名詞につく場合もあります。さらに内藤さんは、親しい女性にも「べえ」をつけて呼んでいたこともあつたそう。なぜ特定の名詞に「べえ」がつくのか。はつきりとはわかりませんが、内藤さんと清水さんと考えてみた結果、特定の人や生きものに対して、愛着をこめてつけていたのではないかとこの結論になりました。

一つ例を挙げると、「ことんべえ」は畑で見かけるカエルのことを指しているそうです(ヒキガエルやトノサマガエルを指しているのではないかという説もあります)。「かえるべえ」ではなく「ことんべえ」という。この「こと」はどこからきたのか。『都留市の方言』では、ヒキガエルの異名の「かざごうとう」からきていて、それが略されて「こと」となっ



ごとなべえのイメージ図。
内藤さんには、10cmほどの大きさでイボ
がいっぱいあるものが「ごとなべえ」だ
という印象があるらしい



内藤さんから方言についてうかがう
(撮影：香西恵)



山梨県の地図

たと考えられているそうです。ちなみに私は、
水に飛び込んだときに「ゴトン」と重い音が
するイメージから「ごとなべえ」の名がきた
のではないかと思っていました。

「ミュージアム都留」の職員のかたにもう
かがい、「ごとなべえ」の話になったときに
「暗くなるまで『あ、あそこにもごとなべえ
がいる』なんて言いながらよくごとなべえを
捕まえにいったよ。最近じゃあんまり見かけ
ないけどね」ということをお聞きしました。

また、都留市つる在住の遠藤静江さん(79)は、

戦時中にタンパク質を摂るために、焼いて食
べていたとのこと。私は最初、「ごとなべえ」

と聞いたときに何を指しているのか想像もつ
きませんでした。でも、都留市の人々は「ご

となべえ」と呼ぶのが当たり前という感覚で
お話をされていて、「ごとなべえ」が昔から

馴染みのある生きもので、そう呼ぶのが人々
の共通認識だったことがうかがえました。

都留市の方言を調べて、私は特定の名詞に
しか「べえ」をつけないことが一番印象的で
した。どうして特定されているのかを探って
いくと、それらの生きものは愛着をこめて呼
ぶほど、地域の人々にとって生活のなかで身

近にいる生きものだったのではないかという
考えに辿り着きました。

*

私は、地元で暮らしているときはあまり方
言そのものを意識していませんでした。で
も、都留市で暮らすなかで、地元では当たり
前のようにつかっていた言葉が相手に伝わら
なかつたときに初めて、これって方言だつた
んだと、気づいた場面が何度もあります。そ
の発見は、地元を離れたからこそその出会いで
した。

お二人の話によると、だんだん方言をつか
う人が少なくなってきたようです。テレ
ビやラジオなどが普及したり、地域外の人と
の交流が盛んになってきたりして、共通語が
つかわれるようになったからだそう。たしか
に、共通語は相手に内容を伝える手段として
便利な言葉です。でも、だからといって方言
がつかわれなくなるのは、その土地ならではの
暮らしかたが見えなくなるようで寂しい気
がします。方言は、その土地に暮らす人たち
だからこそ通じ合う「合言葉」であり、その
土地で愛着をもつてつかわれている「愛言葉」
でもあるのだと思います。

特集を
終えて

音を聞く姿勢

音にはカタチがない。色もなく、目にも見えない。
けれど、日常はたくさんの音に囲まれている。

そんな音から、私たちはいろんな意味を読み取ることができる。
人の願い、生きものの暮らし、モノがもつ個性、
古人が想像した世界、言葉に込められた愛着——。

カタチがないからこそ、音に耳を傾けることは
目に見えない世界に想いを寄せることにつながる。
それは、身近な世界をていねいに見つめる姿勢に似ている。

フィールド 暦

2012.7

山では木の葉が生い茂り、
生きものたちの姿を隠す時期となりました。
飛ぶもの、じっとしているもの、
そこはかとなく自己主張しているもの。
いま、都留市で見られる生きものを紹介します。

本学フィールド・ミュージアム＝文・写真



アルマンモモアカアナバチ

2012年7月26日 都留市田原

巣材（コケ）を持って巣穴に入っていくところです。アルマンモモアカアナバチは、竹筒や木にできた穴を巣にします。昨年、巣にしていた竹を割ってみると、コケがたくさん詰め込まれていました（下の写真）。



シュレーゲルアオガエル

2012年7月26日 都留市十日市場

土のなかに産卵をします。本種の名前は外来種のように、れっきとした日本産のカエルです。



クマノミズキの花

2012年7月4日 都留市田原

ミズキの花に似ていますが、花期が1ヶ月近く遅いのが特徴です。



ショウジョウトンボ

2012年7月26日 都留市十日市場

オスは頭、胸、腹が鮮やかな赤色をしています。メスは赤くありません。



オオムラサキ

2012年7月28日 都留市田原

エノキを食樹とするチョウです。オスは翅^{はね}に青味があります。昨年と同様、今年も多くの個体を見かけます。

工房のドアをくぐると



取材のきっかけとなった「Cafe Natural Rhythm」の
キャンドルランタン

工房のなかは……

魅了する色

JR塩山駅南口の階段を下りると、「Black bird glass works」の名前で活動している山本香織さん（29）が黒いジムニーのなかから笑顔で手を振ってきた。車で工房に向かうあいだ、私が緊張して言葉に詰まったり、会話が途切れてしまったりしても、終始笑顔で明るくはきはきと話しかけてくださった。

工房は、車が多く通る道路沿いにあるガソ

リンスタンドの跡地にある。なかに入ると、まず大きな黒板が目飛び込んできた。その横には小さな本棚。工房の真ん中には薪ストーブがあり、煙突が天井まで伸びている。黒板や薪ストーブの脚は工房で共に作業するアイアン（溶接などの作業）担当の職人が、本棚は山本さんが作ったもの。工房と聞いて薄暗い空間のイメージを抱いていた私は、今

にもカフェやショップを開けそうな、一つひとつのものに山本さんが納得して置いたのだというこだわりが感じられる空間に驚いた。ガラスドアの向こう側では、たくさん車が往来しているのが目に入るが、ここはドアの外とは別世界であるかのように感じられる。

「ふつうに大学にも通ったんですけど、いざ就職となった時に、ふつうの企業に勤めるっていうのが全然想像できなくて。やっぱり何か作ることに携わりたいたい。あと色に対しての執着がすごいあったから、色を使った仕事に就きたいと考えていて。ガラスって面白いかもって、そこからなんです」

本当に突発的に思いついたことが「ガラス」だったらしい。そこで、大学4年生のときから2年間、夜間のインテリアの専門学校に通ったそうだ。通い始めたころ自由課題の授業で、道具の使いかたも分からないまま一人製作に挑戦したのが、最初のステンドグラスの作品だという。

ステンドグラスで使うガラスを見せていた。縦横50cmほどの板ガラスが何十枚も箱に入れている。単色のものもあれば、三色ほどが混ざっているものもあった。そのうちの青っぽい一枚を山本さんが取り出し、光に透かす。すると、今までは見えなかった緑っぽい色や茶色っぽい色が浮き上がってき

た。少し角度を変えるだけでまったく違う表情になるのがとても美しく、しばらく目が離せなかった。このような多彩な変化が、色への執着の強い山本さんをステンドグラスの道に引き込んだ要因の一つなのかもしれない。

不思議な体験

「トントントンってすべてが上手くいって、誰かに動かされている感じだった。初めてだった、あんなに空気の流れを感じたのは。初めて塩山駅についた時の事、すごく鮮明におぼえてるんだけど。結構天気も良くって、さでどっちに行けばって時に、小学生ぐらいの男の子二人が自転車走ってきて、『こんにちは』って突然言ってくれたの。後でよくよく考えてみると、今時あいさつしてくれることなんて少ないじゃん。そう声かけてくれた時から、すごく気分も落ち着いて。そこから奇跡的な物件の巡り会いや、本当は断られるはずだったステンド修行先の面接もうまくいって、本当にあの日は不思議だった。私ここでやっていけるなと思って思えた」

私が山本さんと会うために降りた駅のことだ。私は何気なくそこを降りた。でもそんな



何気なくステンドグラスを並べるときに見せた真剣な表情の山本さん

魔女になりたかった

しばらく考えるような素振りを見せたあと、山本さんが話し始めた。

「ちいさいころの夢は魔女になりたかったの。なれるわけないんだけど、魔法をかけるような仕事をしたって思っ。色を使って作って生み出して。人間の手なんだけど、魔法でも何でもないんだけど。ただの一枚の色ガラスからちよこちよこ手を加えていって。それがお客さんの心を癒したりとか、感動を少しでも与えられたら魔法みたいなことじゃない

い。そういうので多分ステンドグラスに行きついたんだと思うんだけど」

魔女になりたかった女性の作るステンドグラス。なんて素敵なんだろう。たしかに魔法ではないけれど、そこには人の気持ちを動かしたいという強い意志が感じられる。ステンドグラス作家になるまでの経緯、魔女になりたかったという夢。現実であるけれどもどこか日常と違うような、不思議な感覚で取材をしていた。

取材を終え、工房のガラスドアを開いて外の世界へ。車の音が大きくなる。「ああ、戻ってきたんだ」という感覚がした。工房のなかは今までに感じたことのない雰囲気の中で、とても心を惹きつけられた。なぜだろう。ゆつたりとした、独自の世界。作品も、工房も、とてもきらきらと輝いてみえた。山本さんはもちろん、あの空間一つひとつのものに、何ものにも流されない強い意志のようなものを感じる。自分が自分であることに迷いがないようなその輝きに私は惹かれたのだ。もとの世界に戻るのがもつたないような、惜しいような気持ちを抱いて工房をあとにした。

宝の「たから」探し



「厚原」の農道から臨む宝の山々



「金井」で見つけたサボテンの花



「大幡」に流れる大幡川の上流

1954年4月29日、旧谷村町、宝村、盛里村、禾生村、東桂村が合併して、都留市が誕生した。「都留市の旧5町村を巡る」では、各地域を渡り歩き、気になる人やモノから、その地の風土を探っていく。2回目は、旧宝村全域を回ってみた。大学から近いのに、これまで出掛ける機会が少なかった宝を舞台に、風土を探るとはなにか、考えてみたい。

崎田史浩（社会学科4年）＝文・写真

人口2600人ほどの宝は、都留市の北西に位置し、かつては鉱山業で栄華を極めた地域だ。市内を循環するバスのひとつに、「宝鉱山」行きが走っているのを見かけることもあり、私はなんとなく、宝は「宝鉱山」があるという認識が強かった。

本学の学生にとって都留市の行動範囲は、おもに大学周辺や富士急行線沿いに集中している。だから、富士急行線が敷かれていない宝や盛里は、都留市のなかでも滅多に足を運ばない未知な地域。そのため、宝で何か見つけたいと、おのずと興奮も高まっていた。

「灯台もと暗し」

宝の玄関口ともいえる都留市金井で、印象深い出会いを果たしたのが桂林寺だ。宝に突入してすぐ、サボテンの花が咲く石垣を見て、写真を撮っていると「桂林寺に行かれるんですか」と近所のかたに声をかけられた。桂林寺とはなんだろうか。よくは知らなかったのだが、「あそこ睡蓮は綺麗だ」という一言が後押しとなり、お寺を目指してみた。

桂林寺では、野生のサルが出迎えてくれた。

目が合うと境内周辺の木々へ逃げていく。追いかけてみると、ほかにも何頭かの姿を目視できた。そんな桂林寺でひととき目を引くのは、やはり睡蓮の咲く池。縁側に腰掛けて、ゆつくりと境内の庭にある睡蓮を眺めることができる。ちょっとした観光名所だ。3年間、都留市にいたけれど知らなかった。山々からひよつこりとどく富士山の頂を眺めながら、小さな旅にどっぷりはまりこんだ。偶然的な「都留市の再発見」も気分が高まる。まだまだ、見逃せない場所はあったなと嬉しくなった。

*

居住域の隅々が四方、山と川に囲まれた谷あいの世界。そういった地形により、周囲と一線を画していることが宝の特徴でもある。本学から出発し宝に入るには、都留IC付近を起点とし、「宝鉱山」跡へと通じる県道（通称：宝バイパス）を目指するのが分かりやすい。宝の「背骨」のように走る宝バイパスは、大月市と結ぶ国道と接続されているため、決し



(2) 旧宝村

1875年、都留郡の金井・中津森・大幡・川棚・厚原・平栗・加畑の7カ村が合併のあり、村名がなかなか決まらなかった。そのさい、県令藤村紫朗により、「7カ村」ゆえに七福神の縁起による良い結果となるようにと祈って、宝村と名づけてはとの示唆があったと伝えられている。



大幡にある「向山食品工業K・K研修センター」。あやしい看板に誘われ、奥へ進むと見つけたツリーハウス。持ち主は、向山和雄さん(79)。40年前に土地を買ってから、「別荘」を作っている。毎週日曜日に東京都の自宅と宝を往復している。

暮らしの痕跡

て外部と遮断されているわけではない。けれど、一度踏み込むと、帰るときも来た道に戻る必要がある今回の散策は、まるで生きた洞窟を冒険するかのようだった。そんなわけで、奥へ奥へと開拓していく単純さもひとつの楽しみかたであった。

金井・中津森・大幡・川棚・厚原・平栗・加畑の大字が宝にはある。この7つの大字が、

その昔は一つひとつ村としてあり、その後旧宝村として統治されたものの、都留市が誕生してから大字として継承されている。

ひとつの地域を巡ろうとすると、ぼんやりとしていた大字の存在感がくつきりしてくる。自転車が進むのに、それほど大字を意識しているわけではない。頭にあるのは、宝を走っている漠然とした感覚だけだ。しかし、大字ごとに設置されている自治会館に出会うたび、今いる場所が宝のどこにあたるかの目印となってくる。そうすると、大字ごとに微妙に変化をみせる地形や雰囲気もまるごと、宝を知るのに大切な見どころに思えてくる。

例えば、厚原地区は、新しく整備された農

道と農地があり、比較的、水田や畑が充実していた。加畑川に寄り添った平栗や加畑地区は、加畑川に一定間隔でかかる橋が目につく。ある橋を渡ってみると、生い茂る草地のなかに畑が作られていた。同じ宝でも、地理の違いで畑にも変化が見られる。考えてみると、それが当たり前なのかもしれない。

*

地域のなかの、さらに小さな単位で独自の生活圏を匂わす跡は、一括りに地域を俯瞰しては見えてこない。風土を探るとは、何があるのだろうか、そこに浸ってみることから始まる。雰囲気を感じとるのも大事である。

宝の「たから」はなんだろう。特別なものを見つけない、私はそんな好奇心に駆られていた。けれど、地域を巡ることは、今も昔もあり続ける人の暮らしを辿ることだということに、あらためて気づけた。

そこにある山や川に畑、それに集落。どれも、人と関わり合っているモノたち。それに、名前だつてある。それらは、人の営みに「なにか」を吹き込んだきたのだろう。その「なにか」を、次回訪れる旧5町村を舞台に深めたい。

ひろいもの

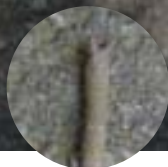
5. ひろうか どうか

ひろうかどうか。迷って、結局
ひろわなかったものがある。

香西恵（社会学科4年）＝文・写真



小径におちていたものたち：
上から、みの虫（ニトベミノ
ガ）、割られた未熟なトチノ
ミ、しゃくとり虫（トビモン
オオエダシヤク）





つも下を見て歩く道がある。編集室へつづく、本学コミュニケーション

ションホール横の小径だ。両脇は植え込みのある小さなスペースになっていて、シラカシやマテバシイが枝を伸ばし、小径のうえに日陰をつくっている。

足元に目を凝らすと、木漏れ日のなかに落ち葉や、虫や、小さなものが落ちていく。ウメの木やエサ台に鳥が来ていることもあるし、道の両端に沿って植木鉢が並べてあるから、歩くときは自然と足が遅くなる。二人並んだらいつぱいで、ほんの数歩で抜けてしまう小さな径だけれど、ここにいろんなものがひそんでいるのだ。

7月4日のこと。みの虫が落ちていた（右写真裏）。近くの木から落ちてしまったのか。とつさにひろおうとして、迷う。別の日には、木の枝にそっくりなしゃくとり虫も（7月29日）。触れずに、そつと見守る。

このときはどちらも、ひろわずに見ているだけだった。気づかれずに誰かに



シ ロツメクサに混じってネジバナが咲いていた。ランのなかま。よく見てみると、小さくてもたしかにランの花の形をしている。こういうものを見ると、誰かに伝えたいくなる（7月11日 本学生協前の芝生にて）

踏まれてしまうかもという心配はあったけれど、誰か気づくかしらというたのしみもあった。みの虫の、落ち葉や細い枝をつないだ見事な、みの、小枝のようなしゃくとり虫が前進する姿も、見つけたときはついしげしげと眺めずにはいられない。もちろん揺れる木漏れ日のなかを、ゆつくり、ゆつくりと横切っていくのを見届ける。

いったん目を離して次に見にいくと、みの虫は道端の植木鉢のへりに辿り着いていた。しゃくとり虫はまだ道の途中で、からだを伸ばして、一休みしているところだった。

いつもの場所が、小さな出会いで特別なものに見えてくる。木漏れ日も、植木鉢も含めてまるごと。

ひろうのは、誰かに見せたいと思うからだ。でも、一つをひろつても、伝えられないものがある。そういうとき、どうしたらいいのだろう。そのもどかしさのあいだで、すべてを「ひろう」方法はないものか、と考えずにはいられない。

小さな畑から

—収穫の季節—



上から見た中屋敷のようす。小屋の左側に見えるのが一つ目の畑。小屋の手前には池があり、その左側に見えるのが二つ目の畑（7月14日）



畑に設置した^{かかし}案山子。左胸に「なかやしき」と書いた名札をつけた（6月14日）

今年度から、本学から歩いて20分ほどのところにある中屋敷フィールドで、小さな畑を拓いて畑しごとを始めました。夏になると気温が上がり、畑の作物の育ちがより早くなってきました。中屋敷の小さな畑、収穫の季節の始まりです。この実りを楽しみにしていたのは、どうやら私たちだけではなかったようです。

持田睦乃（社会学科4年）＝文・写真

畑の収穫

6月10日。一つ目の畑に植えたジャガイモが掘り返されていました。翌日、株の植え替えをすると同時に、一つ目の畑全体が写る場所にセンサーカメラを設置しました。

6月13日。畑に行くと、かなり掘り返されているようすを確認できました。植え直しをしました。株の多くは萎れていて、いかにも元気がないことがわかります。編集室に帰りセンサーカメラの写真を確認すると、ジャガイモを掘り返している動物の姿をとらえていました。写っていたのは一匹のニホンザル。この日、一緒に畑しごとをしている砂田君と相談した結果、「今度掘り返されたら、ひと思いに全部抜いてしまおう」ということになりました。

植え直しをしているときにいくつか収穫して持ち帰ったものをトースターで焼いて食べてみると、思っていたよりおいしくできていました。青かったり、虫に食われていたりすることはありません。あともう少し育てばおいしいジャガイモを収穫できる、と思うとわくわくします。そこでサルに少しでも対抗す

るため、案山子^{かかし}を作ることに。竹を2本組んで服を着せ、頭に使わなくなった植木鉢をかぶせて、全長190cmほどの簡単なものを作って設置しました。

6月18日。案山子を設置してから1週間も間を置かず、また掘り返されてしまっていたので、この日にジャガイモをすべて収穫することにしました。案山子はどうやら効果がなかったようです。すべての株を鍬で掘り返してみると、数が少ないうえにまだまだ小粒なものばかり。「もつと育つのを待っていたかったなあ」と何度も思いながら、ジャガイモを拾います。私にとって、中屋敷でのジャガイモの初収穫は、嬉しい気持ちと悔しい気持ち



センサーカメラがとらえた、ジャガイモを食べるニホンザル（6月13日）

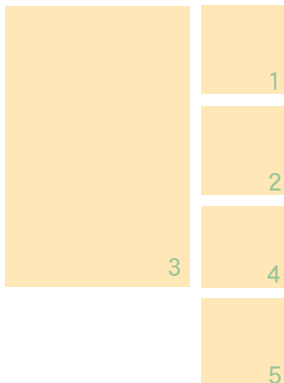
が入り交じった、複雑な思いを抱かせるものとなりました。

ジャガイモの収穫を通して、いきものと向き合うというのは本当に気合いのいることなのだと実感しました。被害が出たときの対処法はいくつかありますが、その対処法をすべて試したからといって、求めた結果が出るとは限りません。何もかも初めてのことだったので、畑しごとを始めたときから、「うまくいかないかもしれない」と心配していました。が、じつさいにここまで育ててきたものが最後の収穫の段階でつまずいてしまうと、何ともいえない切なさや悔しさがこみ上げてきます。中屋敷はとくに、住宅地^{すみか}近くの田畑よりも野生のいきものの住処^{すみか}に近い場所なので、今後もサルやイノシシと関わりながら作物を育てていくことになります。私はジャガイモの収穫を早めざるを得なかったことを「悔しい」と思いました。そのいつぼうで、センサーカメラに写ったサルを見て、いきものの存在を身近に感じ、心のどこかでわくわくしていました。野生との距離を測りながら畑を守っていくにはどうしたらいいのか、これからも考え続ける必要があるようです。



～梅ジャムができるまで～

- 1: ウメのなり口を取って、ていねいに洗う
- 2: 煮る直前のウメ。まだ青みが残っていて、硬い
- 3: 低温のお湯で何度かゆでこぼしていくと青みがぬけてきれいな黄色になる。甘い香りがただよってきた。熟したウメの香りは、桃の香りと少し似ている
- 4: お湯を抜き、火にかけて煮ながらつぶして種を取っていく。取り終わったら砂糖を入れ、煮詰める
- 5: 出来上がったばかりのジャム。黄色く輝くジャムは、甘酸っぱくてとてもおいしい



畑の外の収穫

6月26日。編集部の数名が、中屋敷フィールドでウメを採ってきました。畑を拓いたところから少し離れた場所にある果樹園には、ウメやプラムなどの木が多く生えています。また畑の近くにもウメやクワの木があり、ちょうど畑をサルに荒らされていたところに、こちらにも収穫の最盛期を迎えていました。6月27日には編集部員数名がクワの木に登って実を食べているサルを目撃していたり、私も何回かクワの木の下にサルのもとと思われるフンを見かけたりしていたので、いきものがクワなどの「木になる実」を求めて畑の近くに降りていることは明らかでした。ジャガイモを荒らされていたときにも、畑にクワの実が落ちていたので、クワの実を食べに来たサルが偶然に畑を見つけて、荒らしてしまったのかなあとも思えました。

今回採ったウメのうち、小粒なものはジャム、大粒なものは梅干しにすることにしました。ウメの加工品というと梅干しが代表的ですが、梅ジャムはあまり聞き覚えがありません。以前雑誌で見かけて作ってみたいと思っ

たこともあり、6月28日、編集部の香西さんと一緒にジャム作りにとりかかりました。

インターネットで青梅を使ったジャムの作りかたを調べてみると、ウメは50度くらいのお湯でじっくりゆでていくと熟成が進んで黄色くなるとあります。本当なら時間をかけてゆつくり色を変えるものが小一時間で黄色く熟すなんて、にわかには信じがたい情報です。ウメが熟すのを待とうかとも話していたのですが、すでにいくつか傷み始めていたので、ゆでて熟成させる方法を試してみることに。

ていねいに洗ってなり口を取り、弱火で何度かゆでこぼします。すると、青梅の鮮やかな黄緑色が、黄色と橙色のあいだくらいの淡い色になりました。硬さもなくなり、指でつつくとふにゅつと、ちよつと力を入れればつぶせるくらいの柔らかさに。それから鍋に移し、つぶして種を取ってから砂糖と一緒にとろみがつくまで煮ます。ウメは酸味が強く、多めに砂糖を入れる必要があるのですが、少しずつ味を見ながら砂糖を足していきます。1600gにたいして600gほどの砂糖を入れると、ウメらしい酸味もありつつ、甘みもちょうどいいジャムに出来上がりました。

手をかけてきた畑での収穫はうまくいかなかったのに、とくに何か世話をしているわけではない果樹園や畑の近くの木からは、たくさんの収穫を得られます。畑では夏野菜もサルに食べられてしまいましたし、イノシシが畑の近くの地面を盛んに掘り返すようにもなりましました。でも、畑にサルやイノシシなどのいきものが入り込んでくることは、少し考ええると当然のことです。おそらくいきものにとつて、食べ物がある木があるこの中屋敷は、私たちが畑を拓く前から格好の食事の場だったのでしよう。私たちの畑も、新しい食事の場に見えていくのかもしれませんが。

私たちは畑を拓いたり小屋を建てたりするとその場を「自分のもの」として、入っていくいきものを敬遠しがちです。けれど、その場は本来いきものの住処であり、食事の場なのです。私たちが拓いた畑も、まわりで暮らす動物や植物の生活のなかに置かれているもので、あくまでその環境の一部です。小さな畑を通して、いきものたちの動きの大きな流れを感じとり、私なりに畑とそのまわりの自然とのつき合いかたを見出せるように、残りの半年間、畑へ通い続けます。

5:00

4:00

3:00

アブラゼミやヒグラシ
が鳴き始める

ニワトリが朝を告げる

山や林から虫の声が
聞こえ始める

おはよう

都留

明かりに導かれて

7月7日、午前3時の都留は真っ暗。お店も人も眠っている、都留市中央にある静かな三町商店街を通り、照明の灯っている一軒の建物が目に入る。大豆製品を扱う「相川商店」だ。作業してい^{あいかわ}らっしゃったのは相川政寛さん(56)と奥さんのかねこさん(55)。早朝はお忙しい時間帯だったので、日を改めておうかがいした。お話によると、相川商店は大正12年の創業で、豆腐や油揚げなどを大豆から製造し、地元の小学校や病院の給食として提供しているそう。

給食センターなど、取引先の業務時間との兼ね合いのため、世間よりひと足もふた足もはやく動き出す商店。この出会いから、見慣



れている場所の早朝の顔を初めて知ることができた。さらに、帰りぎわには豆腐などをく^{あいかわ}ださって、「早起きは三文の徳」の喜びをたっぷり噛みしめられる、朝一番の出会いとなった。

牛乳屋さん

都留市上谷にある牛乳屋さん。
^{すぎもとまさゆき}杉本正行さん(55)と、奥さん^{きみこ}の公子さん(53)で経営なさっている。この日は今から都留市内の一般の家庭へと配達にお出かけのところだった。

時間帯、曜日によって配達先が異なり、道志村の商店へ届けることもあるそう。



朝露

瑞々しい草花の朝。写真は「スギナ」。水滴の一つひとつが朝日を浴びてきらりと光り、美しい。



都留の早朝は私にとって未知の世界。どんなに朝早く起きても、外に出ることはなかった。でも、都留の朝はどんなふうが始まっていくのだろう。そんな思いから、出会いや発見を期待して、午前3時〜7時まで、夜明け前の散策を重ねてみた。

平井のぞ実(英文学科4年) 〓文・写真・イラスト

7:00

6:00

防災行政無線で音楽
「みかんの花咲く丘」が
流れる。おはよう都留。

視界が開けて、鳥が
盛んに鳴き始める

早朝から

6 時以降は、農作業
をしている人をちらほ
ら見かけようになる。

写真の男性は、採れた



06:15

十日市場 08/03

きゅうりを遠方に住むお孫さんに送る予
定だとおっしゃっていた。日差しはあつ
たけれど、まだ涼しく、昼間より作業が
しやすそうだった。

始発電車

富士急行線が動き始
める。写真は大月行き。
乗客は少なく、平日で
あったためか、通勤中
の人が中心であった。



05:58

都留市駅 07/30

ラジオ体操

ベンチで休んでいると、ラジオを持った
女性がやってきた。この地区の育成会長で
ある荻野法子さん(48)であった。
おぎのりこ
今からラジオ体操をやるというこ
とであったので参加させていただ
いた。身体がほぐれて、一日の始
まりらしく元気が出てくる。

少子化で、参加人数がだんだん
少なくなっているそう。



06:30

中央3丁目

仲町大神宮近くの公園

07/30

特別な時間帯

私にとって早朝散策の醍醐味は、澄み切った空気に満ちたまち
じゅうで出会うものを、起きたばかりの空っぽの頭で感知してい
くことである。虫の声だけが際立つ静かなまちでは、日中よりも
しぜんと五感が研ぎ澄まされ、一つひとつの出会いに機敏に反応
でき、じっくり向き合うことができた。

自分の足で歩いて知った、活動する人たちや美しい景色などの、朝ならではのまちの表情。これら
は五感まるごと記憶となって、将来、都留を鮮明に思い返すための自分なりのきっかけになるだろう。



06:50

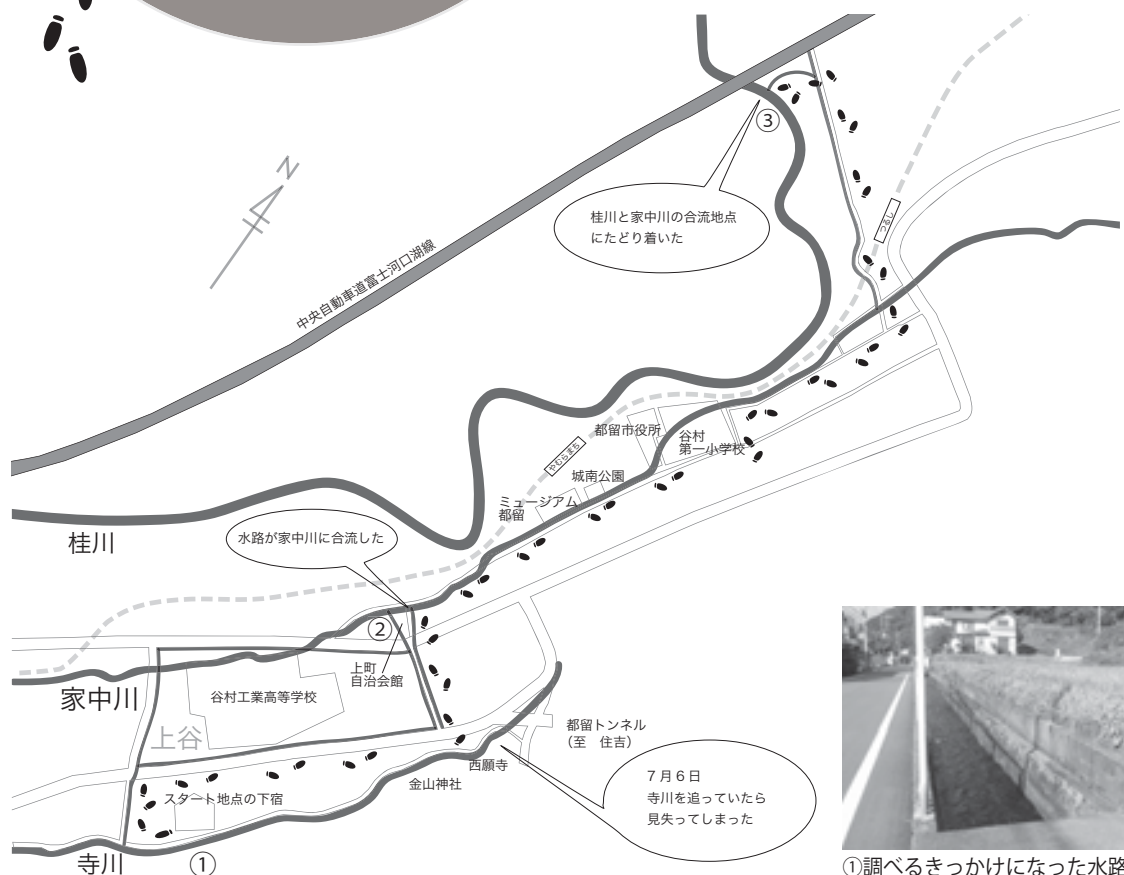
川棚 07/26

水路散策

家中川を追って

私の下宿の前には水路が流れている。水路というよりはちょっとした川のように大きなそれは、わたしの地元には無いものだった。これは、どこまで続いているのだろう？ 気がつくわたしは歩きはじめていた。

海賀沙也佳(比較文化学科1年)=文・写真・図



〈下宿先から桂川の合流地点までの地図〉

※地図中の①、②、③の番号は写真と対応

歩いてみると水路が建物や道路の下に潜って追うことができなくなることがあつ

た。前回、寺川を歩いたときは都留トンネルで見失ってしまったので、今度は家中川を追って桂川と合流するところまで行ってみることにした。

7月10日、編集部の前澤志依さんに付きそつてもらい、再び水路を辿っていくことにした。歩きながら前澤さんから、かちゅうがわ家中川、寺川という二つの川があることを教わった。

下宿から出発

7月6日、都留市上谷にある下宿先の前を通っている水路に興味を持ったわたしは、この水路がどこにつながっているか確かめるため、じつさいに歩いてみた。水路は金山神社や西願寺にそつて流れていた。しかし、その先にあった都留トンネルにさえぎられ、見失ってしまった。

た。だが水路は途切れず続いており、しばらく進むとまた追うことができるようになった。目に見えないところにも水路が張り巡らされている。そんなことを意識しながら改めて道を歩いてみると、なんだか不思議な気持ちになった。

合流地点に到着

上町自治会館のさきの十字路にさしかかったとき、わたしたちは足を止めた。今まで追っていた水路が一本の大きな川へと姿を変えたからだ。十字路を南西から北東に流れている家中川と合流したのだ。並行して流れていた別の水路も、同じように家中川と合流したようだった。細く頼りなかった水路はもうすっかり一本の川になっていた。

その後、しばらく歩いていると家中川は再び枝分かれして、わたしたちがはじめに追っていた水路と同じくらいの細さになった。道は下り坂になり、コンクリートでふたをされた奥を覗いてみると、川が合流地点に向かって勢いを増して流れ込んでいることが感じられた。そのまま川を追ってまっすぐ歩くと、中央自動車道のバイパスの登り口にさし



②家のあいだを流れる水路のようす

かり、左手に桂川が見える。川のまわりに生えている木々をかき分けて進んで行くと、桂川と家中川の合流地点にたどり着いた。

家中川を辿ったことで、わたしは水路が人の生活に深く関わっていることに気づいた。家中川は民家と道路のあいだを流れ、そこに住む人々は川に架けたちいさな橋のようなものを渡って行き来している。そんな光景は、水路が生活の近くになかったわたしには、見慣れないものだった。しかし、川に沿って歩きながらそのようなすを眺めていると、水路が違和感なく人々の生活になじんでいるように感じた。あとで調べてみると、家中川と寺川は町中に水を引くために寛永13（1636）年から3年に及ぶ工事の末に完成した人工の

川だという※。何百年も前から家中川は人びとの生活とともにあったのだ。都留で暮らしはじめて、水路が田に水を引く目的で利用されたり、野菜を洗うために使われていたりするところを目にした。これまで水路は、どのように使われてきたのだろうか。

何気なく目にしていた水路をきつかけに、歩いたことのない道を歩き、そこに住む人々の暮らしに触れることができた。

調べようと行動に移すことで、住み始めたばかりの都留についてすこし詳しくなれた気がする。ここで暮らす4年間のうちに、いろいろなものを見て、この町についてもっと知っていきたい。



③桂川と家中川の合流地点

譚見発

～書道教室を訪れて～



菊地大慶さん(上)と一生懸命
書道に取り組む生徒たち(左)

7月4日撮影

大学からの帰り道、ランドセルを背負い、習字道具を持って歩く女の子を見かけた。習字を習っているのかな。学校で書写の時間があったのかな。習字道具を持って歩く姿に、書道を習っていたころの自分を思い出した。都留にはどのような書道教室があるのだろう。

三枝弥生(国文学科1年) = 文・写真

書道教室——慶明会

私が訪ねたのは都留市立東桂小学校の付近にある「書道研究 慶明会 東桂教室」。そこには書道を熱心に教える菊地大慶さん(40)と、一生懸命に、筆を持って紙に向かい合うたくさんの子どもたちがいた。

菊地さんは東桂教室ほか4ヶ所の書道教室をいとなみ、幼児から大人まで幅広い世代に書道を教えている。その数約135名。曜日ごとに各教室をまわって指導をしているのだそう。指導方法は1枚ずつ提出された作品をていねいに添削していく。多くの箇所を一度に指摘するのではなく、一点を順に直していく。生徒は一回の稽古で上手に書けたと思える作品を20枚程度、菊地さんに添削してもらう。20枚の良いと思った作品を書くのにかかる時間は1時間15分ほど。この時間は、生徒が集中力を保つ我慢強さを鍛えるのにちょうどいい時間だという。慶明会を始めた10年前から変わらないスタイルなのだそう。展覧会活動については慶明会だけの展覧会を年に一回おこなっている。ほかには全国規模の公募展に応募しているという。

やる気スイッチを押す

東桂教室は東桂小学校に通っている生徒が多い。小学生ばかりの書道教室は騒がしくなってしまう。そこで、菊地さんは子どもたちの集中力ややる気の向上のためにさまざまな工夫を施している。

「毎月作っている冊子がありまして、『月刊書道誌』というんです。あと、生徒の作品のビフォーアフターを載せた別紙も作っています」。菊地さんは一冊の薄い冊子と別紙を見せてくださった。生徒たちの作品で埋まっていた。一人ひとりの精一杯の字。作品が冊子に載らないことがないように、半年ごとに載せる機会を作っているそう。別紙では一番最初に書いたものと一ヶ月後に書いたものが比較され、一目で上達したさまがわかる。

「生徒が春休みなどの休みに入ったら和紙漉き体験など、他市でおこなわれる書に関連のある体験イベントに参加していますね」とも菊地さんはおっしゃった。体験イベントは生徒の書道への興味を高めさせると同時に、手先の器用さといったものも学べるのだという。生徒の励みになるような工夫の数々。菊地さんの、生徒に字が上

手くなつてほしいという思いが伝わってきた。

声

稽古が終わり、迎えを待っているのか学校の宿題をしていた小学校6年生の女の子に話しかけてみた。

私は左利きということもあり、入会をためらいました。書道を始めるまで字がとも汚くて、書くことがすごく嫌いでした。今では右でしっかりとした字を書けるようになり、いろいろな大会で賞をとるようになりました。普段書いている字も上手くなって、学校で「字、上手だね」って言われるのが嬉しいです。私は今、書道がとっても楽しいし、大好きです(＊)。

女の子を見たとき、右手で字を書いていた。元は左で書いていたとは思えない、整った字。今彼女が書いている字は根気強く指導した菊地さんと彼女の努力の結晶なのかと、つい彼女の宿題を覗き込んでしまった。

稽古の途中に失礼して、小学校の先生をしていたという女性にお話をうかがった。

私が入会したのは大人になって小筆を使

う機会が増えたのですが、小筆を上手く使えなかったのが理由です。この教室にお世話になるようになって、大きい筆できちんと書けないと小筆も書けないことに気づきました。入会して間もないころは、字が上手く書けなくてくじけそうになりました。最初に習う「一」という字が書けなくて。次に「三」という字を習って。でも書けなくて。私が教師をしていたころは、子どもたちは「一」や「三」がどうして書けないんだろうって思っていました。大人の感覚では書けて当たり前なんです。でも、自分がその立場に立つてみると書けないんですね。人の書く姿を見ているだけでは書けないんです。実際にやってみないと。ああ、今日はお習字の日か……って、構えて行くんですよ。でも書けない。その繰り返し。一年たつてからは自分の気持ちもすく落ち着いてきて、二年目に入って、投げ出さないうで頑張るうって思って、もう三年目。自分の気持ちも姿勢も変わってくるんですね。もう書道は私の生活の一部なんです。

女性は、菊地さんは学校では教えないようなあいさつや姿勢、そのほかの面倒までも見ているのだと、ときおり菊地さんに尊敬のまなざしを送りながら語って

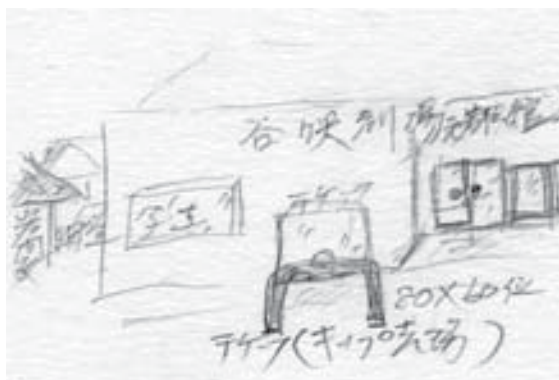
くださった。

ありがとうございますと、稽古が終わって教室を出ていく子どもたちとすれ違う。教室の隅で学校の宿題をしながら迎えが来るのを待つ子どももいる。礼儀作法や姿勢など、菊地さんが子どもたちに伝えるものは書道だけではなかった。

◆
私が以前通った書道教室はどうだっただろう。方法は違えど、飽きさせない、励みのある、なにより技術につながるたくさんの工夫に満ちていた。菊地さんが生徒にたくさんのことを教えていたように、私も先生に教わっていた。昔の自分は書道だけを習っているつもりでいたが、それだけではない、たくさんのかたちを教わっていた。今の自分が気づいたことだ。

書道教室への懐かしさから訪ねた「慶明会」は私に今まで気づきもしなかったことに気づかせてくれた。何か行動を起こさないと気づけないこともあるものだ。私が今回書道教室に行ったように、いつもとは違う、もっと別のことをしてみないと。何かに「気づく」ための出来事が待っているのだから。

H・D・ソローが『ウォールデン 森の生活』（今泉吉晴訳、小学館）で示唆した散歩のほんとうの意味とは何か。散歩をとおして見えてくるものとは。私たちは歩くことで、変貌する自然やまちの今を記録し、フィールド・ミュージアムのたのしみを報告していきます。今回は、かつて谷村にあった映画館です。



「ヤエイ」経営者の長女、大森直枝さん・画

谷の町・史の里 谷村にあった映画館のこと ①

「ヤエイ」と私

谷村に住む50代も後半以上のひとならば、かつてこのまちに複数の映画館があったことを覚えているだろう（※1）。いずれも跡形もなくなつて久しいが、大人にとって娯楽・遊興の場であつた映画館は、子どもたちの暮らしのなかにおいても身近な場所として記憶に残っている。



都留市郷土研究会発行の『郡内研究』第6号によると「ヤエイ」は、「谷村映画劇場」というのがその正式名称とある。そして「若松館」がその前身であり、「若松亭」という寄席がそのまた前身であるという。のちに活動写真館として開業し、昭和2年に内藤興業が買収し「谷村映画劇場」と名前を改めたと書かれている（内藤盛成氏）。これを読み、私の長年の疑問であつた「ヤエイ」と「若松館」が一体化した（※1）。

子どものころ3年ほど「ヤエイ」の隣に住んでいた。いつごろそこに越したか定かでない

いのはつきりしたことは言えないが、小学校の低学年をそこで過ごした。その前は、「ヤエイ」から5分ほどの所に住んでいた。家中川治いの家であつた。台所から裏庭に行くとき、ちよつとした穴があり、そこから家中川の川面が見えた。妙にそのことだけは覚えていた。幼稚園生になるかならないころのことである。

そして昭和24年のあの大火で生活が一変した。その時に「ヤエイ」も焼け落ちた（※2）。小さかつたのでその火事のことは、歳の離れた従姉に連れられて知り合いの家へ富士急線の線路伝いに逃げたこと、空が真っ赤に見え怖かつたことくらいしか覚えていない。焼け残つたわが家に親戚の人が来て大勢でいたこと。それがうれしくて幼稚園に行かなくなつてしまったこと。時間の経過とともにだんだんに人がいなくなつていく寂しさを感じていた。

その後どのような経過で「ヤエイ」の隣に越したのかはわからないし、「ヤエイ」がいつ再建されたのかもわからない。しかし、私が行つたときにはすでに再建されていた。そして昭和27年には映画の上映はされなくなつ

ていた(※3)。建物はそのまま残っていた。その横の空き地が私たち子どもに遊び場を提供してくれていた。砂利だらけの空き地だったが、子どもにとっては最高の遊び場だった。そこで缶蹴りをしたり、缶を使つて竹馬ふうなものを作つたり、その当時、流行つた「太陽写真」を焼き付けたりと、学校から帰るとそこに集まり暗くなるまで遊んだ。

「ヤエイ」は、映画館だったが、その当時の子どもにとつて映画は大人の見るといふ感覚があつたように思う。だから「ヤエイ」は、学校に行くときの集合場所であり遊び場だった。遊び疲れるとベンチに座り、本を読んだり、おしゃべりしたりと思いおもいに過ごせる楽しい場所だった。そして、ウィンドウに貼つたままになっているスチール写真を眺めてあれこれ想像したり、野良犬のチョロをからかったりする場所だった。映画が好きだったのは、家のちびネコのミミーだった。なぜかいつも一番後ろの席に座り、じつと映画を見ていた。いなくなると、いつも映画館に迎えに行きながら、ちらつと映画を眺めたりするくらいしか映画館としての「ヤエイ」の記憶はない。

【編集部注】

※1 谷村に存在した映画館の名称……「谷村座」

「若松館」「谷村映画劇場」「大手劇場」

谷村の映画館・劇場の歴史について詳細は、『郡内研究』第6号(都留市郷土研究会、1999)所収「谷村座と若松館」(内藤盛成)

※2 昭和24年5月13日に発生した火事。『昭和27年版 谷村町町勢要覧』(谷村町役場発行 昭和28年3月印刷)には、「罹災区域は谷村町歓楽街の中心地であり、商店街も多く主要施設としては谷村座、

谷村映画劇場、都留病院、須藤病院、桂川旅館、弘三館、山本旅館、西涼寺、専念寺、東漸寺、御嶽神社、外各商店など、町内著名のものが多数罹災した」と記録されている。同様に、罹災区域は、下町の一部、横町の全部、栄町の大部分、田町の一部で罹災戸数は全焼・半焼計291戸(333世帯、1544人) 。

なお、昭和27年7月現在で谷村町全町の戸数は2755戸、人口14363人であり、いかに大きな火災であつたかわかる。この大火に関する参考文献はほかに、『谷村町大火五十周年記念誌』(儀秀講、1999)

※3 『昭和27年版 谷村町町勢要覧』(前掲)の主要商工名鑑(谷村町主要商工業者名簿)には、映画館は谷村座(横町)と大手劇場(新町)が掲載され、「ヤエイ」はすでに記録されていない。



「栄町銀座通り」(昭和27年版)谷村町町勢要覧より。横町から「ヤエイ」近くの栄町銀座通りをのぞむ



都留市中央1-4「BUONO」から「ヤエイ」跡地をのぞむ(現在は駐車場)。2012年7月31日撮影(北垣憲仁)

起すよる朝

—子どもたちの遊び—



遠藤静江さん
(えんどう・しずえ)

都留市出身。戦争時代を経験し、大学を卒業後、都留市で教員をしながら詩を書き、教員を引退後も服のリフォーム、油絵、染め物などをする活動家です。(撮影：前澤志依)

「人生で何かを始めるのに、遅すぎることはないの」。今年で80歳になる遠藤静江さん(79)は言います。そんな多趣味で、経験豊富な遠藤さんに何かをするという意欲や行動力について伺ったところ、「私は子どものように、つねに生まれっぱなしなのよ」という答えが返ってきました。そのお話のなかで、都留の自然とともに生きてきた、昔の子どもたちの意外な知恵や暮らしをかいま見ることができました。

生まれたモノのゆくえ

あたしね、人間っていうのはね、生まれながらにして何かをしたいっていうね、衝動っていうかき、そういうのあると思うのね。自分でしたい、自分が何かをしたいっての。そ

れが、いつかは摘み取られると思うのね。

というのね、子ども育ててみてね、そしてね、なんかこう、手が動いたり足が動き出すとね、子どもっていうのはすごくなにかをやりたがるのね、たとえばあたしがお茶を入れてるとね、自分でお茶を入れたがったり、そしてお盆にね、茶碗を乗せて持ってきたりするでしょ。ところが母親っていうのはさあ、それこぼしたり壊したりすると困るから、それダメダメって止めちゃうじゃない、ね、だけれど止めなかったらね、どんどん発達していくと思うのね、自分で何かをしたいっていうのはね、生来、根の中にあると思うのね。それをだんだん社会化されてくなくて危ないからとかなんだとかでだんだん規制していつて、そのなかでそういうものをもししたら摘み

取ってるんじゃないかと、私はそう思うのね。うちのこの辺で育った子ども達見るとね、すごかったのよ。だけどたくましいの、その子達が。

田んぼをスケート場や野球場に

ある日授業参観があつたのね。そして学校へ父兄が行ったら、この村の男の子たちがだーれもないの。おかしいねえっていったらば、消防の詰所つてのがあつたの。冬になると夜回りするでしょ、カチカチってする、その人たちがそこで夜番をするわけ。そのところが空いてたのね、鍵もなくて、そしてらそのカーテン全部閉めちゃって、中にいるのがわかんない。そこで遊んでたの！ 学校行かないで。そういうふうなこととか、だ



【田圃スケート場】

「戦前は日当たりの悪い田圃を利用してスケート場がつくられ児童でにぎわった」。写真は、都留市谷村にある西願寺前の田んぼを撮影したもの。子どもたちは、遠藤さんの話に出てくる「下駄スケート」を履いている

出典：『奥隆行写真コレクション』（本学フィールド・ミュージアム所蔵）

けど、ただそれだけじゃなくって、たとえば冬になると、日陰の田んぼへね、水を入れるわけ。そうすると夜10時ごろ一回入れて凍らせて、また夜なかに行つて凍らせてつて、子どもがするのよ。ね、そうすると氷がだんだん厚くなるでしょ？ それで、田んぼでスケートができるわけ。そうするとね、その当下駄のスケートだからね、下駄みたいなのに真ん中に歯がついた、それでこう、鼻緒がついて、それをこういうふうに紐でくくりつ

けるのね、そこで学校へ行く前に滑っていくの。ところがね、そういうことをね、水の番をしない人はね、仲間に入れないの。だからみんな子どもがその番をするわけ。だからその知恵つてのはすごいよね。

そしてね、うちのすぐそばに、田んぼがあつて、冬は二毛作だと、お米作つて麦作るわけ。ところがね、麦を作らない田んぼがあるわけ、そうするとそこへ集まつて子どもが草野球するわけ。ね、だけど田んぼつていうのはね、茶碗のかけらとか、ガラスとかそういうのが入ると危険なのね。なぜつて田植えするときはだしでしょ。だからね、その田んぼの主がね、こう通る時に子どもがね、そういうふうに通ると、だめだーつていうの。そうすると子どもはばあーつと逃げちゃうの、蜘蛛の子散らすみたいに逃げちゃうのね、またそのおじさんがいなくなるとまたするの。そしたら今度おじさんがバラ線（有刺鉄線）を張つたの。でもバラ線つて背の丈のね、こんな高さまで張らないからまたげば行けるわけ。で、こういうふうに、張つても張つても、どんなことしても子どもが遊ぶの。で、もうね、そのおじさんね、諦めちゃつたのね。

それでもうそのまま子どもが遊びたいように遊ばしてくれたの。そしたらちゃんと上に立つガキ大将がね、「お田植えが始まる前にみんな鎌をもつてこい」つていって、みんなその田んぼを耕して返すの。

遊んで身につく「生きる力」



昔は親は全然子ども遊びにはタッチしないから、子どもが、子どもの発想でそういうふうな、遊びがどんどん展開されるわけ。そうするとその遊びのなから、学ぶものつて社会性とか、自然との関わりとか、そういうものがみーんな学べたわけ。だから遊びつてのはものすごく大切なよ。つていうのは楽しくつて、そしてそのなから学べたんだから。「お勉強」なんて言わなくても、子どもつていうのはね、かなりほつとけばね、ものすごい知恵を働かせて、いろんなことができるの。それがいつかだんだん大人の枠に入つて、規制されていくのね。

「都留市郷土研究会」とは

都留市出身者を中心に、同市を拠点に郡内の郷土史を研究している研究会。現在、会員は92名。最近では『都留市の方言』（2008）に引き続き、発足35周年を記念して、都留市の地名を約2年間かけて調査しまとめた『都留市地名辞典』（2012）を刊行した。



第3回では、小形山を散策した



- 第1回 (5/27)：上大月駅-田野倉駅
- 第2回 (6/23)：田野倉駅-禾生駅
- 第3回 (7/29)：田野倉駅-小形山方面

富士路旅録

石造物と出会う

香西恵



〈庚申待と庚申塔〉

人のお腹のなかの虫、三尸（さんし）が、庚申の夜、天に登って神様に悪事を告げ口する。すると寿命が縮まってしまう。それを防ぐために庚申の夜、一晩中起きているのが、庚申待という信仰だ。庚申塔には、庚申待の本尊の青面金剛や三猿などが刻まれている。

田野倉駅から禾生駅まで歩いた回のこと。甘酒橋の脇、道祖神と馬頭観音にはさまれて特徴的な彫刻のある塔があった。庚申塔というらしい。

郷土研究会の安富一夫さん（84）は石造物に詳しい。一つひとつに物語があることを教えてもらうたび、自分が何も知らないことと、そのものが持っている世界の奥深さに驚いてばかりだ。気になりながらもなんとなく通り過ぎていた「石造物」に、富士路を歩きながらあらためて出会えている。



富士路 を歩く会

一本のみちを、一駅ごとにじっくり歩いて歴史を
探求する。それが、「富士路^{ふじみち}を歩く会」だ。今年
の5月から一年半をかけて、現在の国道139号線、
通称「富士路」を歩く。毎回、2時間ほどが目安
である。案内人は、都留市郷土研究会の皆さん。
歩いてみると、電車や車の窓からでは分からない
世界に出会える。大月市の「大月宿」から出発し、
目指すは富士吉田市の「浅間神社」。歩を進め、好
奇心の赴くままに過去へとタイムスリップしよう。

崎田史浩（社会学科4年）＝文・写真

「富士路」とは

甲州街道の大月宿の追分から分岐して上吉田に至る路。富士路
および富士街道と呼ばれる。詳しくは、田野倉、井倉、古川渡、
四日市場、下谷、十日市場、夏狩・境（都留市）、桂町、柿園、
上町（西桂町）、新町、東町、上吉田（富士吉田市）を通るこの
路は、江戸からの富士講行者で賑わった。



過去の地図で現在地を把握



「六地藏」のいわれを聞く参加者

2時間じゃ足りない
なあ。もっととい
う見てまわりたい
んだけども



都留市郷土研究会
会長 内藤恭義さん(80)

ししどめむら
鹿留村

さかいむら
境村

おぬまむら
小沼村

かみくれちむら
上暮地村

につた
新田

あすみりぐち
明見入口

かみよしだむら
上吉田村

げっこうじ

ふじさん

きたぐちほんぐうせんげんじんじや
北口本宮浅間神社

一緒に歩いてみませんか

「富士路を歩く会」は、不定期で毎月1回おこなっ
ています。参加はどなたでも可能です。都留市郷
土研究会の方々をはじめ、私たち編集部のほか
に本学の有志で集った学生が参加しています。

※興味のあるかたは、本学「地域交流研究センター」へお問い合わせ下さい



10 周年企画 第 2 回

『フィールド・ノート』の活動を振り返る ～冊子ができるまで～



3 取材

何を聞きたいのかを考え、下調べをしてから取材先に向かいます。取材は観察することをはじめ、人に話を聞いたり、体験をしたりして進めていきます。取材先には、さまざまな出会いがあり、私たちはそのことに感謝しながら、新しい発見にわくわくし、メモをしたり、写真を撮ったりして記録を取ります。

1 ページの企画

編集部員それぞれが興味や関心のあ
るものに焦点をあてて、どんなページ
にしていきたいか考えます。取材
先の目星をつけ、どのように進めて
いくか予定を立てます。

4 書き起こす

取材をしてから時間が経たないうちに、
体験したことを文章にしていきます。
文章を書くなかで自分の経験を整理し、
なぜ自分が興味や関心を持ったのか、
その経験が自分にとってどのような意
味を持つのかといったことを考察して
いきます。

2 編集会議

週に一度編集部員が集まり、企画の発
表、各ページの進行状況や抱えている
課題の把握、ページのチェックなどを
おこないます。仲間と話しあうことで
お互いにアイデアを出しあったり、
刺激を与えあったりします。



はじめて私が『フィールド・ノート』を
手にしたとき、この冊子がどのよう
にできているのか想像もできませんでした。
こんなに立派な冊子を学生がつくっているの
だと知って驚き、また、感心したので覚えて
います。完成されたものを見てもそこにどん
な苦労があるのか、どんな行程を経てきた
もののなかは、なかなかわからないのです。
冊子に携わるようになった今も、ただ自分の
記事を担当しているだけでは見えてこない作
業があると感じています。

00号が発行された2002年、現在大学4
年生の私は小学6年生でした。そう考えてみ
ると、10年前に発行された『フィールド・ノ
ート』が現在も発行され続けていて、当時小
学生だった私とその冊子づくりに携わってい
ることは、なんだか不思議なことのように思
えてきます。そして都留というまちでの経験
が、74号まで途切れることなくそれぞれの言
葉で文章になっていくことに驚いています。

過去の『フィールド・ノート』を手に取っ
てみると、すべて手書きのページや漫画のよ
うに読めるページ、レイアウトがおもしろい
ページなど、参考にしたいと思うページがた
くさんあります。どの記事も地域と関わった

6 ソートチェック

各ページを冊子のようにまとめ、ページのチェックをしていきます。冊子になったときの雰囲気をつかみ、全員でそれぞれのページの課題などを把握して意見交換をします。



5 校正(赤入れ)

校正 第 校 月 日 担当

書き起こした文章を仲間に読んでもらい、わかりづらい表現やもっと詳しく知りたいところ、ページのレイアウト、感想などを赤ペンで指摘してもらいます。この校正の作業を私たちは「赤入れ」と呼んでいます。自分や仲間が納得できるところまで、何度も赤入れをしていきます。この作業は文章を書き始めてから校了まで、ほぼ継続的におこなう重要な作業です。赤入れをしてもらうことで、新たな視点に気づくことや、その経験の意味を掘り下げていくことができます。

担当ページはそれぞれが責任を持って仕上げていきますが、決して自分一人の力で出来上がっていくものではありません。仲間たちとつくるものだからこそ、より自分が納得できるものに仕上がるのだと感じています。

7 校了

校了

「赤入れ」の「赤」が少なくなり自分や仲間の納得のいくページに仕上がってきたら、本誌発行人である北垣憲仁さんに原稿を見ていただきます。

8 入稿

校了を迎えると編集長と副編集長が原稿のデータを印刷所に送ります。

9 色校チェック

印刷所で刷りだしてもらった原稿の最終確認です。とくに、パソコンの画面上と紙面上では色味が違うので、色味を中心に調整をします。

10 完成!

完成したデータは印刷所に届けます。冊子を読者のもとにお届けしたとき、私たちの編集作業は完了します。



一人ひとりの経験が綴られた、色あせることのない記録です。10年の歩みのなかで変わってきたことも変わらないこともあります、それらを含めて『フィールド・ノート』なのだと思います。

文章が思うように書けない悩みや、校了までに自分のページを仕上げなければならぬ緊張感があるなかで、時には投げ出したいと思うこともあります。それでもこだわりを持って、内容が充実した冊子を完成させたいと思うのは、完成したときの達成感や嬉しさがとても気持ちのいいものだからです。また、地域のかたにお話を聞くと、自分の文章を人に読んでもらうということ、編集部での経験一つひとつが自分にとってかけがえのないものだからです。これらの経験は私という人間を成長させるものになると、実感しています。

先輩がたが積み重ねてきた10年という歴史があり、一緒に頑張っている仲間と『フィールド・ノート』を読んでもくれる読者の皆様がいることを心に留めて、私はこれからも自分の経験したことを自分の言葉で書き続けます。

～『フィールド・ノート』のこれまで～

過去の『フィールド・ノート』を見てみると冊子に携わってきた先輩方の試行錯誤の跡が見受けられます。『フィールド・ノート』の10年の歩みのなかには私の知らない多くのエピソードが眠っていました。



『里山の生活遺産を訪ねて』（2002年3月31日発行）

『フィールド・ノート 00号』が発行される以前に、都留フィールド・ミュージアム館報として発行されたものです。「地域の記憶を記し、大切にしていこうという『フィールド・ノート』の基本的な姿勢の原点」であると本誌発行人の北垣憲仁さんはおっしゃいます。都留の人びとの生きた記憶を学生たちが聞き取り、地域の人の言葉がそのまま綴られています。



00号（2002年4月29日発行）

はじめて冊子というかたちで発行されました。00号から29号までは月刊でした。タイトルには中点がありません。全体で15ページ、A3の用紙を印刷機で刷りだして束ねた、手づくり感の溢れる冊子です。紙面は横組みで、左と右でした。



06号（2002年12月11日発行）

表紙の写真がはじめてカラーになりました。「表紙の写真をカラーにしたい、インクジェットで刷りだした写真を一枚一枚のりで貼っていった」と北垣さん。07号から10号までは再びモノクロの表紙に戻りますが、11号以降は表紙のカラー化が実現します。



49号（2007年3月23日発行）

一冊まるごと富士急行線特集です。富士急行線の歴史から始まり、編集部員一人ひとりが各駅周辺のみどころを取りあげています。この49号をもとに『富士急行線 途中下車の旅』という小さな冊子が誕生しました。北垣さんはこの号に関して「富士急行沿線全体をフィールド・ミュージアムにする試みになった号」であるとおっしゃいます。



60号（2009年7月10日発行）

7周年記念の号です。表紙・裏表紙には00号から59号までの『フィールド・ノート』がすべて並べられています。この60号から冊子の大きさがB5サイズになり、タイトルロゴも現在と同じものになりました。



特別号（2012年7月21日発行）

本学の夏季オープンキャンパスで配られました。これまでの記事のなかから編集部員おすすめの記事を選んで掲載しています。初めて都留を訪れる高校生の皆さんに都留の魅力を知ってほしいという想いが込められた冊子です。

センサーカメラが 写した動物たち

*都留文科大学のキャンパスや裏山に赤外線
センサーカメラを設置して、動物の調査をしています。
この写真は、2012年4～7月に撮影された動物たちです。

本学フィールド・ミュージアム＝文・写真



タヌキ 2012年4月30日

タヌキは裏山でもっとも多く撮影されます。しかし、
何頭のタヌキが生息しているのかはわかりません。



イノシシ 2012年5月14日

イノシシの痕跡はよく目にしますが、裏山のセン
サーカメラにはあまり写りません。



アナグマ 2012年5月16日

自然科学棟前の側溝を、アナグマが通り道にしてい
るようです。



ハクビシン 2012年6月16日

アナグマが通っていた側溝は、ハクビシンも利用し
ています。



ニホンザル 2012年7月5日

大学の裏山のセンサーカメラでニホンザルが記録さ
れたのは、初めてのことです。



ニホンジカ 2012年7月6日

このニホンジカは、角が伸びかけています。角があ
るのはオスの証拠です。

中屋敷通信

十日市場にある中屋敷フィールドに今年も収穫の季節がやってきました。育てている麦が大きく生長し、ウメやクワの木に実がなりはじめました。

麦の収穫

7月18日 午後3時ごろから、中屋敷フィールドで麦の収穫をおこないました。今年は例年使っている畑に加え、新しく畑を^{ひら}拓いていたので、「収穫もいつもの倍なのかなあ」とのんきに考えていましたが、じつさい作業に取り掛かると、不慣れな鎌の扱いや雑草の多さに戸惑い、思うように作業が進みません。3時間以上かけてやっと新しい畑の麦だけ刈取り、いくつかの大きな束にまとめました。畑が広くなると苦労も大きくなることを実感します。そのうえ前から使っていた畑は麦の成長が芳しくなく、今年は収穫できなくなっていました。収穫できた麦はこれから乾燥させ脱穀し、製粉します。畑を広げた分に見合う収穫が得られないのは残念ですが、これからの作業もていねいにしていきたいです。

(持田睦乃)



強い日差しの中での麦刈り
今年の収穫量は一斗缶の半分くらいだった



足踏み脱穀機で取れなかったものを木槌で叩いて脱穀する

その他の活動

6月21日

クワの実採り

8月9日 麦脱穀

26日

麦ネットはり・ウメもぎ

10日 麦唐^{とうみ}箕がけ

7月1日～8月1日 梅干し作り

20日 麦ネット回収・草刈り



ツアーガイドの説明に耳を傾けている高校生のみなさん

オープンキャンパス

7月21日 本学のオープンキャンパスが開催され、大学内は大いに賑わいました。編集部員6名もキャンパスガイドツアーを担当し、学内を一周しながら案内しつつ、施設についての説明をしました。また、オープンキャンパスにともない『フィールド・ノート 特別号』を制作し、高校生の皆さんに配布しました。一足先に未来の1年生と出会え、来年の春が早くも待ち遠しいです。

(深澤加奈)

Field・Note News

自然や地域と関わっていきたい。そんな思いをもった、
私たち編集部員の活動をお伝えします。

6-8月 2012年

自然観察会

7月7日 前日の夜に降った雨もあがり、当日は少し曇り空の過ごしやすい天気でした。今回の観察会に参加したのは、市民のかた8名、学生スタッフ5名の計16名です。大学近くのうぐいすホールの脇から入り、尾崎山の都留自然遊歩道を歩きました。市民のかたと一緒に外来種のビロードモウズイカの分布状況の調査や、陸に上がったばかりの小さなヤマアカガエルを観察しました。今回の観察会では参加された市民のかたと話す機会も多く、カエルを食べていた話や、カエルのことを「ごとんべえ」と呼んでいたことなどを教えていただきました。次回は10月に観察会を予定しています。ぜひご参加ください。秋の尾崎山を一緒に歩きませんか。

(鈴木陽花)



ウリノキについて説明をする学生スタッフ



絵の具やクレヨンを使い、巣箱に色づけをしているようす

アート巣箱をつくろう

7月15日 山梨県立美術館主催の「とびだせ美術館！」が本学美術棟で開催され、編集部員4人がスタッフとして参加しました。この日のテーマは「アート巣箱をつくろう」。すでに組み上がっている鳥の巣箱に、各自好きな絵を描いたり色を塗ったりしながら完成を目指します。100名以上の親子連れが来場し、教室は超満員。大人も子どもも配色や構図にこだわって、2時間半ほど絵筆を走らせました。それぞれの好みを反映して出来上がったカラフルな作品たちが、会場の雰囲気をいっそう明るく陽気にしているようでした。

(牛丸景太)



FIELD NOTE

no. 74 Sep.

発行人

北垣憲仁 [34-35]

統括編集者

西教生 [17,43]

編集長

香西恵 [22-23,38-39]

牛丸景太 [10-11]

前澤志依 [14-15]

編集

狩野慶

大澤かおり [1,48]

小佐野めぐみ

崎田史浩 [20-21,38-39]

反保智栄

平井のぞ実 [28-29]

藤森美紀 [40-42]

持田睦乃 [24-27,46-47]

鈴木陽花 [8-9,16]

椛澤碧 [36-37,44-45]

深澤加奈 [6-7]

水野孝英

海賀沙也佳 [30-31]

三枝弥生 [32-33]

別符沙都樹 [18-19]

細矢芽 [2-3]

細矢萌 [4-5,12-13]

ロゴデザイン

工藤真純

10周年ロゴデザイン

石川あすか

〔 〕は編集担当ページ

FIELD-NOTE (フィールド・ノート)

発行日：2012年9月25日

発行部数：400部

発行・編集：

〒402-8555

山梨県都留市田原 3-8-1

都留文科大学

コミュニケーションホール地下1階

地域交流研究センター

フィールド・ミュージアム部門

『フィールド・ノート』編集部

E-mail: field-1@tsuru.ac.jp

編集後記

夏の暑さに負けないために

こんなに暑い夏は、もう二度とやってこない！ そう
思えるくらいに、夏の暑さを感じる。陸上を
やっていた中学生のころ、夏は勝負の季節だった。強い日
射し。青い空。コンクリートの熱。息を切らして駆け抜け
ていく。もはや暑さを乗り越えて、からだ中の血が沸騰す
るような感覚が好きだった。きっとそんな経験が、暑くな
ければ夏じゃない、と思わせているのだろう。今年も「暑
く」て「熱い」夏を過ごしたい。 (鈴木陽花)

かみなりが鳴りだす暑い季節になると、小さいころ
祖父母の家で夏休みを過ごしていたことを思い出
します。そこには普段と違った発見、楽しみがありました。
特に印象に残っているのは、夕方になってもまだ暑いよう
な日には祖母が決まって庭に打ち水をしたことです。私は
そのようすを見ることが好きでした。柄杓でびしゃりと水
をかけただけで、さっきまでの蒸し暑い空気が嘘のように
ひんやりと心地良いものに変わっていったことが、子ども
だったわたしには不思議に思えたのです。 (海賀沙也佳)

げんきがないときには、やはり夏の風物詩のかき氷
ですね。最近はだらだらとした生活をしていまし
たが、このままではいけないと思い、財布の底をはたいて
かき氷機を購入しました。すこし時季が早いですが、冷凍
庫で氷をどんどんつくっては、かき氷機をゴリゴリと回
してかき氷をつくり、いろいろなシロップをかけて食べて
います。8月の中旬ごろには実家から送ってもらった梅シ
ロップが完成するので、それをかけて食べるのを楽しみに
しています。 (細矢萌)

FIELD・NOTE

次号特集

観

「じっくり観る」から、
世界がみえてくる

2012 年 11 月発行予定



FIELD·NOTE

no.74

発行日 2012年9月25日 (年4回発行)
発行所 〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 都留文科大学 コミュニケーションホール地下1階
地域交流研究センター フォーランド・ミュージアム部門 『フォーランド・ノート』編集部

